



広がる核廃絶の声 いまなお5万6千発の核兵器が！

荳崎平和の会 大滝修

原水爆禁止世界大会2008は、広島・長崎を会場に8月2日から9日まで行われます。国際会議は25カ国5組織から83人（11日現在）を集め2日から4日まで広島で行われます。今年は、世界的な核廃絶の声が大きく高まりをみせる中、国連の現職軍縮担当セルジオ・ドゥアルテ氏（2005年核不拡散条約（NPT）再検討会議議長）が広島で発言することが予定されるなど、2010年のNPT再検討会議へ向けての国際共同行動の一層の強化が求められる中で行われます。昨年の茨城県からは長崎大会へ42名が参加しましたが今年はそれを上回る参加が求められています。

「ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ」を原点とした原水禁運動は、世界唯一の被爆国・日本の草の根の力が世界の平和運動と連携し、世界の世論を大きく動かして半世紀の歴史を積み重ねてきました。2000年5月のNPT再検討会議では廃絶を求める世界の世論におされてアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の5核保有国全てが「核兵器廃絶を達成する」との約束に合意しました。5年後の2005年の会議では、アメリカの妨害などで進展は得られませんでした。次回2010年の再検討会議で2000年合意の実行を要求する声が大きくなるとなるとして新たな高まりをみせています。2007年1月にはキッシンジャーやシュルツ氏など元米政府高官4氏による「核兵器のない世界を！」との提言が行われ、今年の1月には再び「重ねて行動を！」との呼びかけが行われました。これは米政府の中核で核戦略の立案・推進に当たった人物の発言であり、今もなお2万6千発もの核兵器が配備されている危険性を知る立場だけに重いものがあります。

また、今年2月にこれに呼応して開かれたノルウェー外務省主催のオスロ軍縮会議―核兵器のない世界のビジョン実現めざして―では、全ての核保有国を含む20ヶ国100人

が出席、「全ての国の指導者は核兵器のない世界の実現を自分自身の言葉として取組むと同時に、自国の優先課題に位置づけるべきである」と呼びかけるなど熱のこもった討議が行われています。

日本は世界唯一の被爆国、G8サミットは議長国として日本が世界に向けて核廃絶をアピールする絶好の場でありながら、一言もふれず失望をかうものでしたが、今、世界の大きな流れは核大国が特権をふりまわして世界を押さえつける時代はもう過ぎ去ったことを示しています。

8.15を考える

―玉音（ぎょくおん）―

土浦平和の会 小笠原 徹

1945年8月15日正午、福島方面に行く途中の私は、強い日盛りの中、駅舎改札口前に集められた。

駅員から「これから玉音放送があります」と伝えられた。

ほどなくして、日頃は聞きなれぬ発生音調で朗読が始まった。天皇による「ポツダム宣言」受諾の詔勅である。

それを聴いた私は“これで死ななくてすむ”“奇妙な発音だなあ”“これからどうなる”という感慨にひたった。

人々は身に迫る恐怖に怯えていても、「広島、長崎、東京、沖縄」の地獄の惨状を知る由もなかった。

2008年7月8日、私は84歳に入った。中学校の頃、私と机を並べていた5人が土浦の予科練に入隊して、全員戦死したのは63年以前の20歳を数えて間もなくであった。私の兄も2人の幼児を残して33歳で戦死していた。赤紙で殺されたのである。

―玉音―なるものは実に無慈悲、無責任なものである。先だって「そんなの関係ねえ」とホザいている自衛隊高官がいた。これらの同類は「玉音」の戦闘服を着て、集団自決を命令し、県民に銃を向けた軍隊の片割れである。

戦争は悪である。武器は全て凶器である。軍隊は自国民をも殺す殺人装置になりかねない。

改憲勢力は「武器商人」と手を取り合って「靖国精神」と「玉音」の「マジック」を復活させようと企んでいる。

「差別」は戦争の原点。「だまし」は戦争の道具である。私は、年の記入にはやむをえない場合以外は西暦年に行っている。これが世界に通じる歴史認識の「原点」と思うからである。天皇制元号は世界に通用しない。

友部町からも特攻隊員が

内原・友部平和の会 川井 光

内原・友部平和の会では、旧日本軍の筑波海軍航空隊の戦跡めぐりをしました。場所は、笠間市(旧友部町)にある県立友部病院です。ガイドは南秀明さん(笠間市社会教育指導員)、7月19日(土)の9時から11時まで、参加者は旧友部、内原町在住の13名でした。

現在の病院管理棟が当時の司令部棟そのものであること、玄関真上2階の現病院長室が当時の司令官室であることがわかり、まず衝撃を受けました。指令棟と直結する地下壕、2メートル以上もある巨大な号令台、無数に点在する防火用水槽、滑走路の名残をとどめる三角地帯(滑走路跡が現在道路として使われているが長すぎてそれと気付かない)、特攻隊員用寄宿舍跡地、供養塔(戦中に建てられたもの)、司令部用地下壕(コンクリートの不気味な出入り口が見える)、神社の礎石などなど。

われわれが住む地域で特攻隊員が養成されていたとは、普段何気なく利用していた生活道路が滑走路だったとは、参加者一同驚きの連続でした。戦争のむごさ、非常さを実感できたと共に、平和の尊さを改めて感じ取った見学会でした。

平和かわら版

No.508
月3回 発行
2008.8.5

平和新聞茨城版

発行：茨城県平和委員会

〒310-0912 水戸市見川5-127-281

Tel/Fax 029-251-2806

E-mail ibahei@amber.plala.or.jp



第4回 シベリア抑留問題を学び考える - 抑留の実態と今日の課題 -

日時 2008年8月24日(日) 13時30分~16時
場所 水戸国際交流センター
(水戸備前町 TEL029-221-1800)

主催 日本ユーラシア協会茨城支部
(お問合せ 0294-32-1932古川、03-3420-3389佐川)

シベリアなどに抑留された日本人は約60万人。うち死者は6万人以上です。体験者の方々によるパネルディスカッションを行います。ぜひこの機会に参加くださるようお願いいたします。

原水爆禁止2008年世界大会 代表派遣として長女と2人で広島へ

日立市在住 小林真美子

我が家の高校2年生の長女は8月4日から6日、広島で開催される原水爆禁止2008年世界大会に、日立原水協の代表派遣として送り出していただくことになりました。それに同行して、私も新婦人日立支部の大きな援助を受け、参加することになりました。今年の原水禁世界大会は2010年春の核不拡散条約(NPT)再検討会議にむかって、「核兵器のない世界」をめざす国際的全国的行動の大きな跳躍台になろうとしているとあります。こうした年に長女と2人で参加できることに、わくわくと、期待に胸をふくらませています。

長女が世界大会に参加することになったのは千羽鶴がきっかけです。昨年、ふと思いついたように「鶴を折るから折り紙を買ってきて」と言い出して、鶴を折り始めました。その折鶴がどんどんたまっていくので、私は「友だちにも折ってもらって、千羽鶴をつくって広島へ届けに行ったら?」と誘いました。「平和の問題を友だちと話しできない」と言っていました、しばらくして「休み時

間にクラスの友だちに折ってもらうことができた」とうれしそうに報告してくれました。

長女は小学校低学年の時に夫と長男と3人で世界大会に送り出してもらい、似の島を見学、また、平和行進に毎年のように参加し、民青日立班の人たちの世界大会報告集会にも参加してきました。今回の参加で、全国の熱い運動を肌で感じてきてほしいと思います。

千羽鶴は平和行進の時に参加者にも折ってもらいました。折り鶴を郵送で届けてくれた方もいます。きれいな折り目の鶴やちょっと太めの鶴、いろいろな折り鶴を、長女の思い、みんなの思いをつなげて、もうすぐ完成です。毎年話している醇子さんの千羽鶴を広島に届け、核兵器を世界からなくし、戦争をしたがる「国家」をぎゅっと抑えつける大きな波をおこしていきたいと思います。



原子力空母の配備を許すな 米軍基地の再編・強化反対!

7.13全国大集会 in 横須賀

下館平和委員会 小林 清

下館平和委員会から前田会長を含め私と急ぎよ参加することになった岡田さん、日本コンクリート労組の3名の計6名が各自水戸線に乗り小山で合流、そこから直通で逗子へ2時間30分の列車の旅、初めてグリーン車に乗るが満席で座れず古河で下車し次の列車に乗る。逗子で久里浜方面行きに乗り換える。先頭車両は同じ思いの人達だ。

横須賀の地を訪れるのは10年以上前に来て2度目、海の匂いを嗅ぎ改札を出ると巨大な軍艦、普段見慣れていない私にとっては異様な光景だ。炎天下暑い公園を横切り腹ごしらえとデパートの中の食堂で昼食をとる。快適だった建物の中と異なり日差しが容赦なく降り注ぐ集会の人々の中を横切る。ステージに向かって右側の木陰の下に場所をとり集会の一員となる。暑さの中、熱い思いを語りかける姿の必死さに大きな拍手で応え、一体となって盛り上がる。

途中で配布された表面に「la&PEACE」裏面に「STOP 原子力空母」の丸い団扇を司会者の呼びかけに応じて全員が空母配備反対の意思表示をする。茨城からの参加者には会えなかったのが、木陰での休息により元気を取り戻し、早めのスタートをする。要塞のような建物に囲まれた異様な光景の米軍基地の前で、空母ジョージ・ワシントン配備反対のシュプレヒコールをあげ、静岡の民商の方達と語りながら暑い日差しの下終点へたどり着く。駅へ向かう途中、港に目をやると軍艦が見えた。千葉の漁船を沈没させた船もここにあるのかなと話す岡田さんは78歳で、15歳まで横須賀に住んでいたと、懐かしさとあまりにも変わってしまった街並みをみまわしながら語ってくれた。戦争のきなくささが感じられ何とかしたいと思い、居てもたってもいられない多くの人があるその思いをぶつけに来たのだと、私も久しぶりに帰りの人達を見ながら充実した一日を過ごせた。



事務局便り

私たちの運動には2つの面がある。ひとつは文字通りの「運・動」(動かしながら何かを運ぶ) 持続力である。もう一つは想像力(イメージ)と創造力(クリエイティブ)の2つの「そとぞう力」である。運動に関して、広く・大きく想像を巡らし計画をねり、新しい運動を創造していく力である。前者はみんなで決めた事を実行していく忍耐力がある。お手本は土浦平和の会ニュース。あと3回で200号を迎える。月1回として足掛け17年、井上事務局長以下、会員のみなさんと共に喜びたい。後者について昨年からは始まった「戦争と平和を考える特別旬間」の取り組みがあげられる。今年は県内12ヶ所で開催されている。どんな小さな取り組みも出もよい。来年は20ヶ所に増やした。5~10年先をみよう。そこには平和委員会の大きな運動の足跡が残る筈である。夢をもって進もう。(伊)